

# T・B・マコーリー断章

今井 宏

## (一)

最近さまざまな話題をよんでいる論文のひとつに、ローレンス・ストーンの「叙述の復活」<sup>(1)</sup>(一九七九年)をあげることができよう。第二次大戦後の歴史学界においていちじるしく発言力を高めてきた、いうところの「新しい」歴史家たちのあいだに、最近になって「叙述の復活」とでもいうべき、文体、内容、対象、方法における顕著な変化が現われてきたという認識に立って、むしろ、一般原因の究明と分析に重点をおく「新しい」歴史と、叙述を主体に考える「古い」歴史とのあいだに共存の可能性を探ること、この論文の主たるねらいはおかれている。副題として「新しくして古い歴史についての省察」を掲げた著者の意図は、この点に読みとることができるであろう。さてストーンによれば、近

年歴史学に「叙述の復活」といえる現象がみられるようになった原因としては、つぎの三つがあげられるという。まず第一は、経済と人口の決定論的思考、さらには計量史学に対して疑問視する空気が強くなり、そこから「科学的」歴史に対する幻滅が生まれてきた。そして逆に歴史を形成する要因として、個人の意志や社会集団の文化のもつ有効性を認め、また変革に果たす政治権力や軍事力の役割を強調する傾向が強くなった。このことが「叙述」への回帰を不可避にした。第二は社会科学全般にみられる主役の交代ともいえるべき現象であって、新たに人類学がこれまでの経済学や社会学にとって代り、過去に生きた人間の感情、意識、行動様式、価値観に対する関心が増大したこともまた、「叙述の復活」に連なり、それがこれまで「偉大な書物」だけを検討の対象にしてきた伝統的な型の思想史にも書きかえを迫るようになった。第三は、歴史家のあいだに自分の研究を理解しやすいものに

して、読書大衆に語りかけたことの希望が強くなったことである。語りかけるためには、現代の社会に生きるものにとって強い関心が抱かれる対象が選ばれようになり、そこに歴史学の研究対象の拡大、とりわけ「社会史」の隆盛が生まれることになったのである。

このように「叙述の復活」現象を指摘したストーンの論文は、マルクス主義史学、アナル学派、数量経済史学派のいずれをも一括して、歴史における「なぜ」という疑問に対して解答可能とみなす楽観主義者ととらえた点や、とりわけマルクス主義史学を経済決定論と、またアナル学派を生態学ならびに人口論をよりどころとする決定論とわりきってしまったところに、ホブズボウムの批判をうけることになった。<sup>(2)</sup> しかしながら、「心性」の追求による「生活史」、ひいては「社会史」の研究がブームを来たしており、ストーンも指摘するようにそのいくつかの著作がベストセラーとして歓迎され、過去に生きた人間の内面の心性を描写する点において、ある意味では歴史学の著作が近代小説と類似性さえ示すようになってきていることも、近年注目を集めている事実である。それゆえにこそ、ここでいわれる「叙述の復活」において「叙述」のもつ意味があらためて問い直されねばならないであろう。ストーンは、状況の分析を重視する「構造史」的な把握と、「叙述史」のあいだに本質的な差異が認められるのは、後者が題材を年代順に配列して首尾一貫した物語を構成し、しかも特定の人物に照準を合わせる点にあるとし、かつ歴史叙述の条件として「基礎的な原理」<sup>(3)</sup>に導かれた、主題と主張を有し、そのうえ

で表現技術としてのレトリックにも配慮を示すものでなければならぬ、という。ちなみにストーンの論文はつぎのように説きおこしているのである。

「歴史家はつねに物語を語ってきた。ツキディデス、タキトゥスからギボン、マコーリーに至るまで、生き生きとした気品のある文体で叙述を書きあげることが、歴史家の野心の最高の目標である。ところが過去五十年というものは、物語をすることを自負している……いわゆる『新しい歴史』の実践家のあいだでは、すっかり不評に陥ってしまった」。

この冒頭の個所にもみられるように、近代における「歴史の語り部」の代表として必ず引き合いにだされるのは、ギボンであり、そしてマコーリーである。現在の歴史学を取りまく状況を念頭におきながら、T・B・マコーリーに関する近年の若干の研究を紹介し、あらためてイギリス史学史上におけるマコーリーの位置づけを探るための問題点の素材を提供するのが、本稿のねらいである。<sup>(3)</sup> 現段階においては、今後の研究を進めるための断章に留まらざるをえないことを、はじめにお断りしておきたい。

#### 注

(1) L. Stone, "The Revival of Narrative: Reflections on a New Old History", *Past and Present*, No. 86, 1980.

(2) E. J. Hobsbawm, "The Revival of Narrative: Some

Comments”, *Past and Present*, No. 87, 1980.

(3) あらためてふれるまでもないが、「叙述」への関心は、ストーンの提言を待つまでもなく、とりわけイギリスの歴史家のあいだで脈々と生きつづけてきた。すでに一九七〇年以降に王立歴史学会においてR・W・サザーンが歴史叙述の問題を講演のテーマに選び、それはわが国にも紹介されている(R・W・Southern, “Aspects of the European Tradition of Historical Writing”, *B. R. H. S.* 1970—4. 大江・佐藤・平田・渡部訳『歴史叙述のヨーロッパ的伝統』創文社、一九七七年)。なおストーン論文に触発されて書かれた、鈴木利章「W・スタップズの国制史から社会史へ——英国史学思想史における学問的正確さと叙述の面白さへの一試論」(『神戸大学文学部紀要』第八号、一九八一年)は、比較的文献の乏しいイギリス史学史をきわめてコンパクトにまとめた好論である。この論文から多くの情報と示唆を与えたことを特記しておく。またイギリス史学史のアンソロジー、J・R・Hale ed., *The Evolution of British Historiography from Bacon to Namier*, Cleveland, 1964 ならびにそれにつけられた編者の“Introduction”にも啓発されるところが多かった。

(二)

マコーリーのイギリス史学史上の位置を見定めるにあたって

は、その著述活動がイギリスの大学に歴史学が確固たる専門分野として定着する以前の時期に属するものであったことを、まず確認しておく必要があるであろう。すなわちイギリスにおいてアカデミックな環境に歴史学が位置づけられるよりも先にマコーリーが登場し、一八四八年、その『イギリス史』の一・二巻の刊行によって、当時としては驚くべきほど多くの読者を獲得した。しかし『イギリス史』は、広汎な読者の歓迎とは裏腹に、のちにふれるように、当時ようやく形成されつつあった専門史家と、とりわけヴィクトリア朝の知識階級からは、きびしい批判と反発を招いたのであった。マコーリーの歴史叙述は、所詮、民間史学として生きつづける運命を背負っていたのであり、アカデミズムとは関わりのない場所に、その熱烈な読者をみいだしていたようにみうけられる。だがはたしてマコーリーは、イギリス・アカデミズム史学とは当初から無縁の存在だったのだろうか。

『イギリス史』の刊行よりも一〇〇年以上も前に、「近代史欽定講座教授」というポストをケンブリッジ大学に下附(一七二四年)していた王室関係者ならびにときの政府は、『イギリス史』の評判を無視しなかった。その刊行の翌年、マコーリーその人に対してこの講座教授職への就任の要請が行なわれたのである。一八四九年六月二十四日、この講座の教授ウイリアム・スミスが死去すると、アルバート公からマコーリーに会見したい旨の申し出があった。マコーリーは、その前日の六月三十日にときの首相ジョン・ラッセル卿あてにつぎの書簡をしたためている。

「ジョン卿閣下。

ケンブリッジの繁栄と名誉を心から願っております出身者のひとりといったしまして、空席になっております近代史教授につきまして、一言意見を申し述べたのをお許しいただけると存じます。もしもステューヴンが候補に上っているのでございまして、私はこれ以上何も申しません。彼がどんな競争相手に対しても成功を収めるのを望まざるをえないほど、私は彼を尊敬しているものでございます。たとえ仮に彼の講義が、全生涯を書育の中でござりまして参りました人の講義と比べて深遠さを欠くものでありまして、そのような欠陥も、これまで重要な事件に長きにわたってたずさわって参りました何ものにもまさる経験から生まれる実地の政治的手腕によって、十分埋め合わせがつくものと考えます。しかしもしもステューヴンが問題にならないのでございまして、ケンブルの資格こそ貴下に御一考をわづらわするに価するものと、あえて進言させていたゞきます。お察しいたしますところ、御多忙の貴下はまだ彼のアングロ・サクソン時代の国家組織についての書物をお読みになっていないことゝ存じます。この書物こそはわれわれの歴史の知識の蓄えにまことに貴重な寄与をなすものであり、たとえ大衆の人気を博すことはなくとも、今後つねに学者や思想家からは大いに尊重されるものでありましょうと私が申し上げる場合、それは私ひとりの意見ではなく、学識あるものすべての見解であることを信じて疑いません。

わざわざ御返事下さる必要はございません。貴下がどれほど御多忙かはよく承知しておりますし、貴下のごくわずかのお楽

しみの時間をたとえ一分たりとも奪ってしまうようなことは、不本意至極に存じます。

敬具

T・B・マコーリー<sup>(1)</sup>

ここには植民省次官という官僚出身で歴史家としての業績を持たないJ・ステューヴンと、ドイツでJ・グリムに学んで近代的な歴史学の方法を身につけていたアングロ・サクソン史家J・ケンブルという、噂に上った二人の候補者に対するマコーリーの真意がかなりはつきりうかがえるであろう。事実、この手紙をしたゝめた夜、クラップムにかけた彼は、この問題についての風評を耳にし、つぎのような感想をメモしているのである。「ステューヴンは完全に撤回されたということだ。それを聞いて一安心。だがケンブルは酒好きだという厄介な噂もある。ともあれ私はのんびきならない立場にいる<sup>(2)</sup>」。この文面からすれば、マコーリーは翌日生ずるであろう事態を多少とも予測していたともみられる。翌日バッキンガム宮殿に伺候したマコーリーに対して、「私が仰天したことに、アルバート公殿下はかの教授職を私に提供された」のであった。彼がそれを受諾しなかった心境については、残された史料は十分には語ってくれない。一説によるとこの教授職の俸給は年額四〇〇ポンドにすぎず、『イギリス史』から多額の印税をえていたマコーリーは、教授職よりも自由な執筆活動をとった、とみられる。しかしながらこの講座に任命されたのが、ケンブルではなくてJ・ステューヴンであったという厳然たる事実が残った。そしてさらに一八六〇年にこの講座を襲ったのは、むしろ小説家として令名高かったチャールズ・キングズリーであった。つ

ぎに一八六九年、かのJ・R・シーリーが後任となり、彼が以後二十五年間この職に留まることになる。

ここでマコーリーに対するケンブリッジ大学近代史欽定講座教授職への就任要請をめぐるエピソードにやゝ詳しく立ち入ったのは、マコーリーに端を発するホイッグ史観が、その成立の当初からアカデミックな世界とは無縁のものたるべきことを運命づけられていた点を強調するためではない。むしろ大学の構成員の選任そのものが、大学を離れた場所で、必ずしも学問的業績とは無関係に行なわれていた事情の一端をも明らかにしたかったためである。しかしながらも仮にマコーリーがこの講座に就任していたならば、そして厳密な史料批判に基く科学的な歴史の主唱者であったシーリーが就任するまでの二十年の無為の空白が存在しなかったならば、おそらくはイギリス歴史学の体質にも若干の相違が生まれていたのではないだろうか。「叙述」を尊重する歴史と、「新しい」歴史の乖離、お互い同士の冷やかな敵視も生まれなかったのではないだろうか。少なくとも、マコーリーに直接つながる二十世紀の代表的なホイッグ史家G・M・トレヴェリアンの生涯にみられた屈折を生まなかったであろうことだけはたしかである。そもその入学当初、シーリー教授のマコーリーに対する山師呼ばわりをいたく傷つけられた青年トレヴェリアンは、突然母校のトリニティ・カレッジのフェローの地位を放棄して、大伯父同様に自由な執筆活動の途を選ぶ<sup>3)</sup>。「二十世紀になってケンブリッジ大学でますます幅をきかせてきた重箱の隅をほじくるような煩瑣な学風の萎縮的な雰囲気」への反発がその理由であ

り、そうした雰囲気を体现していたのが、欽定講座教授J・B・ビュアリであり、「歴史は科学そのものであり、それ以下でもそれ以上でもない」との主張であった。しかしそのトレヴェリアンも、それから二十年ほどして、ビュアリの後任に迎えられてケンブリッジに復帰する。J・ステイヴン→C・キングズレー→シーリー→アクトン卿→ビュアリー→トレヴェリアンという、ケンブリッジ大学近代史欽定講座教授の系譜をたどるとき、その出発点にマコーリーをおいてみることは、あながちたんなる空想以上の意味を主張できるのではあるまいか。<sup>4)</sup>

しかしだからといって、歴史学者としての専門的な訓練をうけなかったマコーリーが、仮にこのポストに就任したとしても、イギリスの大学における歴史学の体質に飛躍的な改善がみられたであろうとは、到底考えられない。たしかに多くの人が指摘するように、それまでに書かれたイギリス史の通史に比べるならば、マコーリーが用いた史料は、格段の広がりと深さをもつものであった。周知のようにその『イギリス史』は、冒頭で開陳された著者の執筆意図が実現されることなく未完成に終り、極言すれば「名譽革命史」こそそのタイトルにふさわしい。この観点からすれば、政界に進出して「ホランド・ハウス」グループに加入を認められたマコーリーが、使うのを許された、C・J・フォックスが『ジェームズ二世史』を執筆するのに使用した史料や、現在はブリティッシュ・ライブラリーに所蔵されている『マッキントッシュ・コレクション』は、当時としては名譽革命史の叙述には第一級の史料であった。また彼が、パンフレット、新聞、歌謡に至る

まで広汎に史料を渉猟し、現地への探查にも熱心であったのを評価する声もある。<sup>(5)</sup> 何しろ国立公文書館(Public Record Office)が開館したのは、彼が死んで三年後の一八六二年のことであり、歴史手稿委員会(Historical Manuscripts Commission)が活動を開始するのは、さらにその七年のちのことである。<sup>(6)</sup> もっとも『国事文書摘要』(Calendars of State Papers)は、彼の存命中の一八五六年にその第一巻を刊行したが、問題のジェームズ二世の治世に關してはまったく手がつけられておらず、ウィリアム三世治世の文書の編纂は一八九五年になってやっと着手されるのである。いわば新しい史料批判の方法に立脚した史料編纂事業が開始される以前の限界の重荷を負いながら、マコーリーは彼なりの努力を史料の蒐集にも払った点は認めねばなるまい。

したがって『イギリス史』に対する反響のうちでは、彼と同時期を扱った歴史家からは比較的好評をもって迎えられたのも、当時のイギリスの歴史学の水準からみてあえて怪しむに足りないであろう。しかしマコーリー自身もその一員と考えていた、ヴィクトリア朝の知識階級を構成する人びとからは酷評を浴びせられることになった。「これは素晴らしい書物である。……マコーリー氏は歴史家にふさわしい素質を高度に持っておられるように思われる」との基本的な立場に立って、マコーリーの叙述に散見される不正確さに対しても一定の許容度を認める書評を彼の存命中に発表したのは、ウォルター・バジョット<sup>(7)</sup>であったが、おしなべて知識人たちのマコーリーに対する姿勢は冷たく厳しいものであり、ことに彼の死後というものは、マコーリー批判の大合唱の声

は高まるばかりであった。その場合、批判の焦点は二つあったようにみうけられる。ひとつはヴィクトリア朝の繁榮に酔いしれて、醸成されつゝあった深刻な社会問題に眼をつぶつたまゝ、楽天的な進歩信仰にマコーリーはとりつかれているとする反発であり、他のひとつは彼の叙述が思想の深さと精緻さを欠き、成り上りの中産階級うけを狙った無教養な俗物主義に彩られているとみられたためであった。この二つがマコーリーにおいては緊密に結び合わさっており、それが彼の歴史叙述に魅力を覚えさせる反面、批判と反発の種となったのであった。前者の点を強調する批判者としては、カーライル、J・S・ミルを、また後者の立場を強く打ち出したものとしては、彼を「ペリシテ人の偉大な使徒」とよんだM・アーノルド、「中産階級の群衆の一員にすぎぬ」とマコーリーの俗物性を槍玉にあげたJ・モーリー、そしてかの欽定講座教授の三男レズリー・ステイーヴンなどの名を挙げる事ができる。<sup>(8)</sup> そしてかの政治家グラッドストーンは、マコーリーの浅薄さに眉をひそめながら、読者を危険な落とし穴から救いだすために、短くとも尊敬のできる公正な注のついた新版の刊行を願ったのであった。<sup>(9)</sup>

ところでこれらの十九世紀末までのマコーリーに対する評価を、まことに適確におさえている評伝が、早くも一八九三年にわが国において刊行されていることには、驚きを禁じえない。徳富蘇峰の主宰する民友社が刊行した『世界拾貳文豪叢書』の一卷として書かれた『マコウレー』がそれであり、著者は自ら「日本のマコーレー」たらんとした、竹越与三郎(三叉)であった。この

書物については別の機会にふれたことがあるので、後述との関連(10)において要点だけをみることにしたい。本書には執筆にあたっての典拠は挙げられていないが、その内容からみて明らかに本書よりも十数年前に刊行されている、マコーリーの甥が執筆した、決定版ともいべき伝記を参照していることは、ほゞ疑いえないところである。竹越にとつてマコーリーの『イギリス史』は、まさに「理想的歴史」の域に近いものであったが、それが大歓迎をうけた理由を列挙して考察した竹越は、就中、その叙述の文体のもつ魅力と、政治家の体験に裏打ちされた歴史把握の説得力を強調する。前者の点は、彼が「談話するが如くに歴史を書き」、「彼の歴史は小説にして、理論を兼ね、詩歌にして哲学を兼ね」、またその歴史叙述はあたかもパノラマに似て「読者をして中心に立て、四方を望見する感」を抱かせた点に求められている。そして後者の点については、「彼の歴史は無識なる学者の歴史にはあらず、政治家の識見あり、政治家の経験あり、之に加ふるに学者の理論と、紳士の冷静とを以てせる生ける歴史家の歴史也」とされているのである。この他、マコーリーの歴史叙述が人物を中心に据えるものであったことに對する竹越の評価も高いが、この点に關しては、ヨーロッパの史学界に強まった、歴史の科学性の主張と物質尊重の傾向に對する、竹越なりの一定の批判が含まれていたことを、見逃してはならないであろう。マコーリーに對する竹越の共感の基盤にはそれが存したからである。

しかし竹越はたゞ無条件にマコーリーを讚美するだけに留まるものではない。彼もまたマコーリーの欠陥は「哲學的の深奥を欠

くの一事」につきるといふ。この点が、先にみたようなヴィクトリア朝知識人のマコーリー批判を繼承している点であり、竹越が本書の執筆にあたってかの地におけるマコーリーの歴史叙述の受容とそれへの批判についても、かなり敏感な触手をのぼしていたことをうかがわしめる。といつても竹越は必ずしもこの点には深入りせず、むしろ「樂天的現世教の信者」であつたマコーリーを肯定的に評価しようとしているのである。

またこの竹越による評伝には他にも、最近の研究動向からみて、注目しなければならぬ把握がある。マコーリーを評價するにあつて竹越は、彼の同時代人であるカーライル、J・S・ミルとの比較にも多くの筆を費やしているが、比較の対象として最大の力点がおかれているのは、かのエドモンド・バークなのであつた。マコーリーの政治活動を追う際にたえずバークを引き合いに出し、さまざまな政治的争点についても両者間の対照よりもむしろ類似を強調する竹越は、マコーリーのチャーティストに抱いた「憤怒」にふれ、「若し彼をして十八世紀の終にあらしめば、仏国革命に向つて憤激、痛責の声を起せしものはボルク（筆者注、バーク）にあらざして、彼なりしならん」といふ。たしかに一見したところでは、「革命的民政の分子」に對する弾圧を主張したバークと、「外国の民政的立憲的分子」に援助を与える必要を説いたマコーリーは、異なる陣營に属するかのようにはみうけられる。しかしそうした違いを生んだのは、竹越によれば「時勢の差異」のもたらしたものにすぎず、「ボルクをしてマコウレーの時代にあらしめ、マコウレーをしてボルクの時代にあらしめば両

者地を替へん」と把握されているのである。たゞこゝでも「マコウレーがボルクに及ばざる所は、其哲學的深奥を欠く」点に求められているが、とりあえずこのわが国最初のマコウレー評伝において、マコウレーとバークの間の思考様式と政治哲学における類似性が強調され、かつ前者は後者からの思想的系譜に位置づけられていることを確認するに留めておこう。

## 注

- (1) *The Letters of Thomas Babington Macaulay*, ed. by Thomas Pinney, 5 vols. vol. V, Cambridge, 1981. p. 61.
- (2) *Ibid.*, n. 3. ノールズ (D. Knowles, *Lord Macaulay 1800—1859*, Cambridge, 1960, p. 29) は「マコウレーはステューヴンを推薦したとしてゐるが、この書簡ならびにノートからみて、それは誤りである。」
- (3) トレヴェリアンの辞職の事情に関して、cf. G. M. Trevelyan, "Autobiography of a Historian", in his *Autobiography and other Essays*, London, 1949, pp. 16f.; J. H. Plumb, *G. M. Trevelyan*, London, 1951, pp. 14f. (大野真弓監訳・トレヴェリアン『イギリス史』第一巻、みすめ書房、一九七三年、所収、x-xiiページ); Mary Moorman, *George Macaulay Trevelyan: A Memoir*, London, 1980, pp. 80f.
- (4) この系譜において占めるトレヴェリアンの学風については、彼が占めた欽定講座のポストに一九六九年ついたチャドウィックの就任講義 (Owen Chadwick, *Freedom and the Historian*, Cambridge, 1969) が示唆に富む。なお鈴木利章「歴史家 G・M・トレヴェリアンとケンブリッジ大学——歴史学と文学とに関するひとつの随想」(『外国学研究』V、神戸外語大、一九七七年) を参照。
- (5) マコウレーの使った史料の種類と範囲、またそのもつ価値に関しては、cf. Charles Firth, *A Commentary on Macaulay's History of England*, London, 1938, chapters 4 & 5.; Hugh Trevor-Roper, "Introduction" to *Lord Macaulay, The History of England*, Pelican ed., Middlesex, 1968, pp. 16—7.
- (6) R. C. Richardson, *The Debate on the English Revolution*, London, 1977, p. 61. (今井宏訳『イギリス革命論争史』刀水書房、一九七九年、九五ページ)。
- (7) 一八五六年四月 *National Review* などの書評は掲載された Walter Bagehot, "Mr. Macaulay", in *The Collected Works of Walter Bagehot*, ed. by N. St. John-Stevan, 4 vols., vol. I, Cambridge (Mass.), 1965.
- (8) マコウレーに対する批判については、とりあえず cf. Joseph Hamburger, *Macaulay and the Whig Tradition*, Chicago, 1976, pp. 174f.; Peter Gay, *Style in History*, New York, 1974, pp. 97f. (鈴木利章訳『歴史の文体』ネルヴァ書房、一九七七年、一二八ページ以下)。



なお個々の論者のマコーリー批判論文をあげれば、つぎのとおりである。

M. Arnold, "Joubert", *Essays in Criticism*, Chicago, 1968.

J. Morley, "Macaulay", *Critical Miscellanies*, vol. I, London, 1877.

Leslie Stephen, "Macaulay", *Hours in a Library*, new ed., vol. II, London, 1892.

(9) W. E. Gladstone, "Macaulay", *Gleanings of Past Years*, vol. III, 1879.

(10) 今井宏「明治時代におけるホイッグ史観の受容」〔東京女子大学比較文化研究所紀要〕、第二十五巻、一九七四年。なお紙面の都合上、本書からの引用の注記は省略する。

### (三)

前節でもふれたように、マコーリーの歴史叙述は、ようやく読書する楽しみを知った大衆の熱狂的な歓迎とは裏腹に、形成期のイギリス歴史学界ならびに知識人からは、一般に酷評をもって遇された<sup>(1)</sup>。そうした理由もあって、ホイッグ史観が正統の座を確保したにもかかわらず、マコーリーとその歴史観に関する研究は、その後もけっして稔り豊かなものではなかった。マコーリーが彼を敬愛して止まぬ甥のG・O・トレヴェリアンという絶好の伝記<sup>(2)</sup>著者をもったことも、この傾向を助長したとみられる。余人をし

ては接近不可能な資料にも恵まれて、いわば内側から伯父を理解しようとした、このマコーリー像をしのぐものは、少くとも世紀初頭に至るまでは不可能であった。また後述するノールズも指摘するように、マコーリーの活動分野が、雄弁家、エッセイスト、詩編作者、そして歴史家ときわめて多岐にわたるものであったことも、彼に対する全面的な理解にとっての障害となつて働いたと考えられる。しかし今世紀も三〇年代以降ともなると、正負両方の意味において、ふたたびマコーリーが取り上げられ、論じられるようになった。

H・バターフィールドがその『ホイッグの歴史解釈』<sup>(3)</sup>を著わしたのは、一九三一年のことである。この書物においてはマコーリーは名指して俎上にのせられてはいないが、それが何よりも彼を確立者のひとりとみなすことのできる歴史解釈——二元対立による把握を基礎とする進歩史観、現在の時点からする過去への遡及的理解——に鋭い批判をむけたものであったことは、周知のとおりである。もっとも若き歴史家バターフィールドをしてこのような姿勢をとらせたのは、何よりも彼が第一次大戦後の「不安の世代」に属したためとみられるのであって、未だ根強く残存していたヴィクトリア朝流の楽天主義に対して警鐘を打ち鳴らすことに、この書物の真の意図があったとみななければならないであろう。というのも、バターフィールドもその十数年後の第二次大戦末期に著わした『イギリス人とその歴史』<sup>(4)</sup>（一九四四年）においては、アカデミズム史学成立以前からのイギリス史学史の吟味の上に立って、ホイッグ史観こそはイギリス人がどのようにその過

去を利用したかを典型的に示す、まぎれもないイギリス的な歴史解釈であり、イギリス人の政治的伝統と政治意識に深く根を下ろしたものであることを力説してやまないからである。この立場は、彼の第二次大戦後に発表した史学史に関する研究にも、基本的にうけつがれているように考えられる。附言すれば、このバスターフィールドの「転向」とみられるものを通して、あらためてその『ホイッグの歴史解釈』が批判の対象としたものを検討し直すことが、イギリス史学史研究のひとつの課題として要請されているといえよう。

いっぽうではバスターフィールドに代表されるようなホイッグ史観への懐疑が強くなっていった時期に、オックスフォードの近代史欽定講座教授サー・チャールズ・ファースの講義が、『マコーリー『イギリス史』注釈』<sup>(6)</sup>という表題で、その死去三年目の一九三八年に刊行された。この著書はかつてグラッドストーンが期待したような、真の意味の「注釈」ではなく、『イギリス史』の成立過程、その典拠となった史料ならびにその利用法、マコーリーの歴史観、さらに社会史・軍事史・スコットランド史・アイルランド史といった領域における彼の視点などを検討したものであった。ファースは生硬な科学的な立場をとる歴史家とは異なり、歴史学の研究成果の一般読者への伝達に心がけた歴史家であっただけに、マコーリーをあえて大学における講義の対象に取り上げたのであろう。その意味で本書の節々にはマコーリーに対する尊敬と共感を読みとることができるのであって、いわばアカデミズムの形成以前の時期に執筆されたマコーリーの歴史叙述を、確立した

アカデミズムの眼で問い直すことに、ファースの意図は存したのである。

マコーリーに対する関心に明らかに復活の徴候が現われはじめたのは、第二次大戦後の一九五〇年代末のことであった。一九五九年は、マコーリーの死去一〇〇年にあたっていた。その記念の意味もあって、マコーリーを論じた論文のたぐいが相ついで発表された。すなわちM・A・トムソンは「ヒストリカル・アソシエーション」のために小冊子を書き、<sup>(7)</sup>ときのケンブリッジの欽定講座教授D・ノールズは一九五九年十一月に記念講演を行ない、それを翌年に公刊した。<sup>(8)</sup>また前年から誌名を『ケンブリッジ・ヒストリカル・ジャーナル』から『ヒストリカル・ジャーナル』に改めていた、マコーリーゆかりのケンブリッジの歴史学雑誌にも、A・ブラウニングが論文を発表している。<sup>(9)</sup>この三者の論点には、それぞれの執筆意図からして重なり合う個所が多くみられるが、総体的にみてトムソンとノールズの二人は、マコーリー以後の歴史学の発達に照らしてその欠陥と限界を指摘しながらも、むしろその歴史叙述に肯定的な評価を下している。ところがブラウニングは、現代の歴史家を取りまく状況との対比に立って、マコーリーが吐露した楽天的な進歩主義の信仰は、彼の同時代人にも嫌われたが、現代人にとってはいっそう嫌悪すべきものになってしまった、と主張する。<sup>(10)</sup>その意味でマコーリーの歴史叙述は「消え去った世界からのメッセージ」たる性格をもつが、一〇〇年たった現在の時点においてこそ「感情に走らない評価」が可能であろうとして、いくつかの興味ある問題点を提起している。

まずしばしば最大の批判を招くことになったマコーリーのホイッグ偏重についてブラウニングは、マコーリーはけっして生まれながらのホイッグ主義者ではなく、「クラップム・セクト」の一員であった父親の影響のもとで当初はトリーに改革の期待を寄せていたのであり、ホイッグへの接近がみられるのは、むしろ歴史研究を通してであった、と主張する。またこれと関連して、『イギリス史』の真の主人公はウィリアム三世そのひとであり、ウィリアムの立場をイングランド側で具現化したのは、かの「日和見主義者」ハリファックス侯に他ならなかったとマコーリーが考えていたという論点を、あらためて提示しているのも見逃せないであろう。<sup>(11)</sup> さらにブラウニングによれば、マコーリーの真の弱点は、史実把握の不正確さや過度の党派性の主張にあったのではなく、明解さを求めるあまり誇張した表現をとった点に求められる。たしかにそのような文体が、人物像をカリカチュア化しているとの非難を招き、また不正確さを過度に批判されることになる要因として働いたのであった。この指摘は、マコーリーの思考様式と表現には「修辭的にこった演説口調の論究」(“declamatory disquisition”)が一貫して流れている、とのトムソンの主張にも通ずるものであって、それがマコーリーの文体論的研究への道を開くことになるのである。<sup>(12)</sup>

最後に、マコーリーの歴史観とホイッグ主義の関連についても、ブラウニングは興味深い論点を提出している。それは、歴史家マコーリーを論ずるにあたっては、あくまでもその評価の基準は『イギリス史』に求めねばならない、とする主張に発する。<sup>(13)</sup> こ

れは明らかに過去にマコーリーの歴史観を論じたファースが、彼が『エディンバラ評論』に一八二八年に発表した「歴史論」(“On History”)を検討材料としたことへの批判がこめられている。周知のように、『イギリス史』が公刊されるまでのマコーリーの文筆の名声は、このホイッグ・リベラル系の雑誌に彼が匿名で発表した「ミルトン論」(“Milton”, 1825)をはじめとするエッセイによるものであって、「歴史論」こそはのちに『イギリス史』において結実することになる彼の歴史観の原型であった、というのがこれまでの把握の基本線であった。しかしながらここで考慮に入れねばならないのは、マコーリー自身は自分が寄稿した数多くのエッセイを長い寿命をもつものとは考えてはおらず、あくまでも時論的な性格をもつものと自認していたことである。<sup>(14)</sup> したがってかねてよりエッセイ集の公刊を勧められながらも、やっと一八四二年になってそれに同意したときにも、その全部を収録するとは許さなかった。「歴史論」は再録されていないのである。とすれば、マコーリーの歴史観とホイッグ主義の関連、言葉を換えれば先にブラウニングが指摘した、若きマコーリーのホイッグへの「転向」という問題を検討するためのもっとも重要な材料は、マコーリー自身の意図としては時論的性格をもつものとされた多数のエッセイに求めねばならない。<sup>(15)</sup>

こゝに提起された、歴史家マコーリーはいかにして誕生したか、という問題に、現在もっとも精力的に取り組んでいるのは、アメリカの歴史家ジョン・クライヴである。彼は自ら総編集者となって『イギリス歴史叙述古典叢書』を刊行中であるが、その一

冊として一九七二年に『マコーリー選集』をT・ピニーとの共編で刊行した<sup>(16)</sup>。それにはこれまでエッセイ集には未収録であった「ロンドン大学論」(“London University”, 1826)をはじめとする四編のエッセイが発表当時の原文のまま収録されている他、選挙法改正賛成などの四つの演説、インドの教育についての覚え書き、『イギリス史』からの二章、五編の詩、書簡類もみられ、マコーリーのすべての活動分野が見渡せる配慮がなされている。クライヴのマコーリー把握の基本線は、この『選集』につけられた要領のよい「序文」に明らかであるが、彼は翌年には大著『マコーリー——歴史家の形成』<sup>(17)</sup>を発表した。代々スコットランド長老派教会の聖職者を勤めた家系に生まれ、「クラップム・セクト」の一員として奴隷制の廃止などの主要な改革に貢献した父ザカリーのもとにはぐくまれたマコーリーの精神形成史を、未公刊の史料をも駆使して内面からの照射を試みているこの五〇〇ページもの大著は、マコーリーが『イギリス史』の構想を胸にインドから帰国する時点で閉じられている。本書の最大の貢献は、フランス革命とナポレオン戦争の余波のもたらした内外ともに極度に緊張した情勢のなかに、前述したような中産階級出身のひとりの青年の精神形成を位置づけた点にある。これまでのマコーリー把握との関連で本書の提出した論点のなかでもっとも注目をひくのは、一八二〇年代におけるホイッグ、トーリー両党の改革に対する姿勢、ならびにそれを生んだ政治意識の伝統、さらにはその基底にある歴史意識にまでメスを入れて、マコーリーの原点を明らかにしようとしていることである。

「昔のぼくはトーリーであった。今のぼくはラディカルだ。しかし将来もけっしてホイッグにはならないだろう」とは、マコーリーがケンブリッジの学生時代に語った言葉として伝えられるものであるが、そのマコーリーが後世「ホイッグ史家」としての不動の地位を与えられるようになった秘密は、いったいどこにあるのか、これが本書を貫くクライヴの問題意識である。その場合、マコーリーには学生時代からイギリス史、就中十七世紀史に対する関心があったとはいえ、<sup>(18)</sup>先述したように、「ミルトン論」の発表によってあえて前世紀からつづいていた歴史論争に介入したことが決定的であった。しかもクライヴによればさらに重要なものは、ヒュームに代表されていた「新トーリー史観」に対抗するものゝ立場をマコーリーが継承したことである。それはキャサリン・マコーリー夫人、J・ミラーの線に立つ十七世紀史の解釈であり、そこには「コモンウェルスマン」の伝統が生きつづけていた。ここにいう「コモンウェルスマン」の伝統とは、キャサリン・マコーリーが「ミルトン、ハリントン、ネヴィル、ニーダムなどの十七世紀の共和主義イデオロギーをつぎの世紀の政治世界に継承させようとした、(政権の座にあるホイッグに反対するものとしての)<sup>(21)</sup>『真正ホイッグ』ないしはハリントン主義者の系統に属していた」ことをさす。マコーリーが一八三〇年にランズダウン卿から提供された「ポケット・バラ」を通して政界に進出した事情をめぐって、彼ははたしてホイッグ主義者であったのか、それともトーリーからの転向者であったのか、いなたんなる「猟官者」にすぎなかったのか、という、当時以降ずっと彼の評

価をかけた問題は、何よりもまずエッセイ執筆期のマコーリーの歴史観、とりわけ彼に働きかけた「コモンウェルスマン」の伝統に即して検討されねばならない、とするのがクライヴの主張である。

たしかにナポレオン戦争終結以後の政治状況において、ホイッグ、トーリーの両党を決定的に分けたのは、奴隷制廃止、カトリック教徒の解放、議会改革といったさし迫った争点もさることながら、むしろその基底に存した十七世紀の遺産に対する評価のちがいにあったといえるであろう。その評価のひとつは、先述の「コモンウェルスマン」を通してC・J・フォックスに継承されたのであって、その意味でマコーリーが議員当選後に、かつてのフォックスの本拠であった「ホランド・ハウス」グループに迎えられた事実は、彼の政治姿勢に下された評価というよりも、その歴史意識に深くかゝわっていたのではあるまいか。

クライヴの提起した問題は、これだけに留まらない。選挙法改正以前の段階においてホイッグの伝統を形づくっていたのは、イギリス革命の議会派から、「コモンウェルスマン」を媒介にして、さまざまな屈折を含みながらもC・J・フォックスに至った系譜の他に、セルデンからウイリアム三世期の大法官ソマーズを経てバークに到達する「昔ながらのイングランドの法律家の伝統」の二本柱が存在した。こゝでいう「昔ながらの法律家の伝統」とは、法は人民と国王の両者を拘束するがゆえに、一方の国制侵犯に対しては他が報復しようと考えた点において、人民の同意を楯に人民の抵抗権・革命権を肯定した前者の伝統とは峻別さ

るべきものであった。後者の保守的な伝統を「真の」ホイッグ的伝統とみなすならば、政治理論に「契約」というある意味では恣意的な要素を導入したロックは、この「真の」ホイッグ的伝統においては必ずしも公認のイデオログとしての位置を占めえなくなる。マコーリーはバークを尊敬したがゆえに「誤てる道」に踏みこむ危険から救われたというアクトン卿の評価をクライヴは継承して、マコーリーこそはホイッグの二つの伝統をつなぎとめる役割を果たした、とみるのである。<sup>(22)</sup>このようにして急進的なホイッグの伝統と、それよりも保守的なバークに至る系譜が、重なりあって共存したところに、マコーリーの歴史意識の特徴がみいだされることになる。

すでにかなり以前に竹越によって取り上げられたマコーリーとバークの関連という問題が、こゝであらためて注目をひくようになったわけであるが、この問題に正面から取り組んだのが、J・ハンバーガーの『マコーリーとホイッグの伝統』(一九七六年)<sup>(23)</sup>であった。ハンバーガーの立脚点は、マコーリーはまだ政治の世界に足を踏み入れる以前から、一貫して「古典的日和見主義者」(Classical Trimmer)の立場を取っており、彼がホイッグの一員として加わったのも、それがこの立場を貫くのにふさわしい政党であったために他ならない、とする点にある。「古典的日和見主義者」が最高の優先順位を与えるのは、進歩を達成することではなく、過激分子による政治が生み落とすことになる国内対立の危険を遠ざけることにある。したがって穏健な改革こそが、均衡と安定の達成というはるかに重要な目標に向かうために取るべ

き唯一の手段なのであった。このように考えるハンバーガーは、「日和見主義」こそが、マコーリーの著作と政治の両方の活動において、その基底に横たわっていた意識であることを分析する。マコーリーのホイッグ主義に保守的な思考と自由主義的なそれとが混在しているのもそのためであり、またそのことが彼が同時に急進主義者とウルトラ・トーリーの両者に反対し、過去と現在の両方のホイッグを批判したことを説明する。

「古典的日和見主義者」といえば、まず第一に想起されるのは、かのハリファックス侯ジョージ・サヴィルであろう。<sup>(24)</sup>その意味ではからずも前述したブラウニングの問題提起は、このハンバーガーの研究において結実することになる。名誉革命史に終ったマコーリーの『イギリス史』の主人公は、「主権者にして自由のチャンピオン、革命の指導者にして社会秩序の擁護者」<sup>(25)</sup>であったウイリアム三世であり、その業績をともに荷ったのが、「日和見主義者のなかの日和見主義者」ハリファックス侯そのひとであった。しかも後者の「日和見主義」が最高度に発揮されたのは、彼が「王座と国民の間の調停者としての役割」を演じようと願った点に認められるのである。ハンバーガーによれば、このハリファックス侯評価にこそマコーリーの歴史叙述と政治活動の秘密を解く鍵が存するのであって、とくに歴史観に即していえば、彼に先行する名誉革命解釈——たとえば立場を異にするハラム、彼同様にホイッグ史家であったマッキントッシュのそれ<sup>(26)</sup>——との決定的な差異がみいだされる。したがって「マコーリーがもつとも賞讃した政治思想家が、ロックではなくてハリファックスであったこ

とは無視できない<sup>(27)</sup>」のであって、その名誉革命史にロックがほとんど登場していないことも、あえて怪しむに足りないのである。<sup>(28)</sup>マコーリーの政治意識とその基底をなす歴史観の研究は、名誉革命の理論的支柱としての権威ある地位を、すでに十八世紀においてロックが獲得していた、とする通説に対して、疑義を提出しているといえるであろう。

## 注

- (1) たゞしこれらの批判を考察する際には、ヴィクトリア朝知識人にみられた知的貴族主義をも射程に入れねばなるまい。cf. Noel Annan, "The Intellectual Aristocracy" in J. H. Plumb ed., *Studies in Social History: A Tribute to G. M. Trevelyan*, London, 1955.
- (2) G. O. Trevelyan, *The Life and Letters of Lord Macaulay*, 2 vols., London, 1876.
- (3) H. Butterfield, *The Whig Interpretation of History*, London, 1931. (越智武臣他訳『ホイッグ史観批判』、未来社、一九六七年)。たゞし本書ではその第五章が「歴史家としての腕」と題して、歴史叙述の問題を論じているのを見過してはなるまい。
- (4) H. Butterfield, *The Englishman and his History*, Cambridge, 1944. (New ed., 1970).
- (5) H. Butterfield, *Magna Carta in the Historiography of the Sixteenth and Seventeenth Century*, Reading.

- 1969.
- (9) C. H. Firth, *A Commentary on Macaulay's History of England*, London, 1938.
- (7) Mark A. Thomson, *Macaulay*, London, 1959.
- (8) D. Knowles, *Lord Macaulay*, Cambridge, 1960.
- (6) A. Browning, "Lord Macaulay", *Historical Journal*, II-2, 1959.
- (10) すでにこれよりも先にオランダの歴史家P・ハイルがマローリーの時代遅れを指摘した酷評をマローリーに対して浴びせている。Peter Geyl, "Macaulay in his Essays" in *his Debate with Historians*, The Hague, 1955.
- (11) Browning, *op. cit.*, p. 156.
- (12) P・ゲイ、前掲書。なおゲイの他にも、Jane Milgate, *Macaulay*, London, 1973 がいつて込んだ考察を試みているが、本稿においてはマローリーの文体について十分検討する余裕がなかった。
- (9) Browning, *op. cit.*, p. 151.
- (14) *Ibid.*
- (15) マローリーが匿名で発表したエッセイが、W. E. Houghton ed., *The Wellesley Index to Victorian Periodicals*, 3 vols. vol. I, Toronto, 1966 の刊行によって確認が容易になった。
- (9) John Clive and Thomas Pinney ed., *Thomas Babington Macaulay: Selected Writings*, Chicago, 1972.
- (17) John Clive, *Macaulay, The Shaping of the Historian*, New York, 1973.
- (8) G. O. Trevelyan, *op. cit.*, vol. I, p. 56.
- (6) マローリーがケンブリッジに在学中、"Essays on the Life and Character of King William III" の中でジョン・リチャード・カンニングの賞をうけた。この論文については cf. Clive, *op. cit.*, p. 82. 後掲するハンバーガーが、この論文をきわめて重視している。そしてこの論文はマローリーの名譽革命把握の原点をなしたのである。A. N. L. Nunby, "Germ of a History: Twenty-three Pages of a Macaulay Cambridge Prize Essay", *TLS*, May 1, 1969 によった。
- (20) この歴史論争については、ちしめたり大野精三郎『歴史家ホームとその社会哲学』、岩波書店、一九七七年をよむ R・C・リチャードソン、前掲書を参照。
- (21) リチャードソン、前掲書、七五ページ。なお「ロギンウエルスマン」に関しても cf. C. Robbins, *The Eighteenth-Century Commonwealthman*, Cambridge (Mass.), 1959: J. G. Pocock, "Machiavelli, Harrington and English Eighteenth-Century Ideologies" in his *Politics, Language and Time*, New York, 1971.
- (22) ホイックの伝統に関するクライヴのこのような解釈が、アクトン卿の把握によっている。cf. Clive, *op. cit.*, pp. 93-4. アクトンが「二重の祖縁」(a double pedigree) とも述べた。

- (23) Joseph Humberger, *Macaulay and the Whig Tradition*, Chicago, 1976.
- (24) 山口孝道「ハリファックスの政治思想——名誉革命期の貴族政治思想の一例」『西洋史学』、一一九号、一九八一年）は、ホイッグ支配の理念的先駆者として彼を位置づけている。なおホイッグ史観を再評価しようとした以後のバターフィールドも、ハリファックスの政治思考をホイッグの伝統に位置づけ、高い評価を与えている (*The Englishman and his History*, pp. 88—90.)。
- (25) このフリーズは、(19)でふれた学生時代のマコーリーの論文にみられるものである。
- (26) それぞれの解釈については、リチャードソン、前掲書、九五ページ以下を参照。
- (27) Humberger, *op. cit.*, p. 101.
- (28) マコーリーはその『イギリス史』においてわずか三回しかロックに言及していない。しかもそのいずれにおいても彼の『政府論』は一切論じられていない。T. B. Macaulay, *The History of England*, Everyman's ed., 4 vols., vol. I, pp. 409, 507, vol. IV, p. 189.

#### (四)

すでに紙数もつきたので、今後の研究のための若干の問題点を指摘して、この「断章」に一応の結びをつけることにしたい。

マコーリーの歴史叙述をイギリス史学史上に位置づけるにあたって、とりあえず三つの課題が設定できるように思われる。先にもふれたように、マコーリーがその『イギリス史』の冒頭において開陳した全体の構成は、結局のところ果たされずに終り、われわれの前には、名誉革命を中心とする前後の時期の詳細な叙述だけが残された。とすれば第一の課題は、近年の名誉革命研究の成果と照らし合わせて、あらためてマコーリーの「叙述」の意義と限界を確認することにある。わが国における十七世紀イギリス史の研究が、ピューリタン革命から次第に名誉革命に比重を移しつつある今日、マコーリーの「叙述」の部分的修正に留まらず、名誉革命像の全面的書き換えが要請されており、しかもその前提には、このマコーリーに対する批判と再評価という課題があるといえよう。(2)

第二の課題としては、マコーリーを確立者とするホイッグ史観のアカデミズム史学への影響、そしてその帰結として現われたホイッグ史観の正統史観としての座の獲得過程の検討にある。ことをイギリス革命に限定していえば、S・R・ガードナー→ファース→G・デイヴィズという系譜に立つ、アカデミズムの研究が結実していく過程において、マコーリーの何が残り、また何が拒否されていったか、という問題である。(3) 戦後の研究史において、反ホイッグの先鋒として華々しく登場したH・R・トレヴァーローパーが、(4) かわめて柔軟な理解をマコーリーに対して示しているのを知るとき、この問題は避けて通ることはできないであろう。



最後に残されたのが、「社会史」をめぐる問題である。政治史中心に叙述を進めたマコーリーは、叙述の流れを断ち切って第三章に「社会史」をおいた。それが朗読されるのを聞いて育ったG・M・トレヴェリアンが、中絶した大伯父の先駆的業績を『イギリス社会史』<sup>(5)</sup>にまとめ上げたのは、周知の事実である。たしかにこの系譜の社会史は、現在、世に喧伝されている、いわゆる「新しい社会史」とは、その対象においても、また方法においても、およそ異質のものである。しかしながら、本稿の最初で取り上げた、ストーンという「叙述の復活」現象からみると、マコーリーとトレヴェリアンの二人の「叙述」にはまだまだ学ぶべき点が多く残されているように思えてならない。社会史研究における「叙述」の役割、他日の検討の課題としたい。

## 注

- (1) マコーリーの本書の執筆意図ならびに構成プランは、Macaulay, *op. cit.*, vol. I, pp. 1—3 (今井宏訳、林健太郎・沢田昭夫編『原典による歴史学の歩み』、講談社、一九七四年、五八一—三ページ所収)に明示されている。
- (2) まだ完結していないが、浜林正夫『イギリス名誉革命史』上、未来社、一九八一年が刊行されたことは、誠に喜ばしい。なおわが国における部分的修正の試みとしては、植村雅彦「ウィリアム三世の即位と『権利宣言』——『名誉革命』の評価に関する一試論」、『西洋史学』、一一〇号、一九七八年)、および浜林正夫『「権利章典」の成立』(新井明・田中

浩編『近世イギリスの文学と社会』、金星堂、一九八〇年)などがある。またイギリスにおいては、明らかにマコーリーを意識した名誉革命再評価の試みとしては、J. R. Jones, *The Revolution of 1688 in England*, London, 1972がある。

(3) とりあえずリチャードソン、前掲書を参照。この問題を論じたものに、P. B. M. Blais, *Continuity and Anachronism: Parliamentary and Constitutional Development in Whig Historiography and in the Anti-Whig Reaction between 1890 and 1930*, The Hague, 1978があるが、十分検討する余裕がなかった。

(4) トレヴァロパーは、一九六五年ケンブリッジの「トレヴェリアン講義」において、クラレンドン、ヒュームそしてマコーリーの三人を論じた(H. R. Trevor-Roper, "Three Historians", *Listener*, vol. LXXN, No. 1905—7, 1965)。それは「トリー史家とホイッグ史家の間の根底からの対話」を企てたものである。この関心が第二節(5)であげた編著へとつながっていったとみられる。

(5) G. M. Trevelyan, *English Social History*, London, 1944 (藤原浩・松浦高嶺訳『イギリス社会史』上、みすず書房、一九七一年。下、近刊)。